

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

国際化・グローバル化とSDG s 「質の高い教育」について（覚え書き）

著者	笹川 孝一
出版者	法政大学資格課程
雑誌名	法政大学資格課程年報
巻	9
ページ	41-45
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00023059

国際化・グローバル化とSDGs「質の高い教育」について(覚え書き)

法政大学キャリアデザイン学部教授 笹川孝一

1. はじめに

この数年間、法政大学社会教育主事課程の「現代社会と社会教育」では、春学期には「エゴイズムと生涯学習・キャリアデザイン」というテーマで授業を行ってきた。この授業については、本年報『法政大学資格課程年報』の第5号と第6号でその一端を報告した。また、秋学期には「国際化とグローバル化」というテーマでの授業を行ってきた。受講生は毎年50～60人程度である。

その中で気づいたことは、次の通りである。①学生たちは「国際化」や「グローバル化」について関心はあるが、両者の関連や違いについての概念的区別が明確でないことがほとんどである。②東京などの町の様子、アルバイトや外国旅行、留学やワーキングホリデー経験を通して何らかの体験、イメージは持っているものの、そこから「体験の経験化」作業に進んでいないことが多い。③その結果、日常生活としての食べ物や音楽、映画、ファッション、ちょっとした英語、中国語、韓国・朝鮮語等での会話という日常の世界と、国際的な経済や産業、環境、ジェンダー、発展途上国と「先進国」とが裏表の関係で抱える問題などについての広い視野や構造的な把握の世界とが結びついていない。④その理由として、そうした広い世界と身近な自分の世界との接点、あるいは媒介項がうまく形成されていないことがあると見受けられる。

2. SDGsの17の「ゴール」と第4ゴール「質の高い教育」との関係～「質の高い教育」とは「大学」で行われている「教育」のことか？

そのような課題を解く一つの材料として、日本政府も参画して国連が採択した「SDGs (Sustainable Development Goals)」がある。近年は外務省をはじめとする政府機関も力を入れ、文部科学省も大学を含む各種の学校等でもそれについての取り組みを奨励している。そのこともあり、学生たちにとって、日常生活と世界・地球がつながる予感を持っているように思われる。とくに、この授業が「社会教育主事」「社会教育

士」系の科目であることもあり、その第4ゴール「質の高い教育をすべての人に」については関心が高い。

だが、「質の高い教育」とはなんであるかと問うと、多くの場合に、「大学で学ぶこと」という答えが返ってくる。言い換えると、「質」をチェックする手立てを持たないままに、「大学で学ぶ」ことが質の高い教育だと、とりあえず答えているのである。これでは、「識字率」が高ければ質の高い教育だと言っている類の答えであって、「critical and functional literacy = 批判的・機能的な文字の活用」ということはどこかへ飛んでしまっていることといわざるを得ない(笹川孝一『キャリアデザイン学のすすめ』法政大学出版局 2014年)。

3. 創造的な人生を支える創造性を育む教育

そこで、授業で、「創造的な人生と創造的でない人生とはどちらを望むか？」と問うと、「創造的な人生の方がいいと思うけど、それは結構大変だなと思う」という答えも含めて、ほぼ全員が「創造的な人生の方がよい」と答える。

問題は、ではどうしたら「創造的な人生」になるか、そもそも「創造性」なるものはどのようにして生み出されるのか？その点に話を向けると、学生たちは本気になってくる。

(1) 歴史貫通的な生命の営みと人の営みと「近代化」の必然的な要請としての契約主体、リテラシー主体としての「development」

この点を考えるためには、地球上での生命体の発生と展開の一環としての「ヒト」「人間」とよっての歴史貫通的な営みを押さえておく必要がある。そのうえで、「人間」という動物の独自性をおさえ、さらに「近代化」と呼ばれる、「産業革命(工業革命)」以後の、大量生産・大量消費・大量廃棄システムと、その上に必然的に発生せざるを得ない契約社会化、個人の人権と主権、エスニックグループやジェンダー、勤労者等の組織的な権利という観念が発生し、それは不可逆的なものである。そこで、それを主体的に活用していくためのリテラシーとリテラシーの社会化、その上に立つコントロ

ールタワーとしての「人格」と「諸能力」「臨機応変の能力、他者との共働りとしてのコンピテンス」「プロジェクト遂行能力としてのキャパシティー・器量」の育成、自己形成、自己教育・相互教育が求められることになる。そこに、生涯教育、社会的教育、キャリアデザインが登場することになる、という歴史的な文脈のおさえも欠かせない。

(2) 「創造性」展開のイメージ

そのことを前提に、「創造性」の展開のイメージを図にすると次のようになる。ここでは、朝岡幸彦・笹川孝一・日置光久編『湿地教育・海洋教育』（筑波書房、2019年）で、認識活動・教育学との成立、湿地学の構造、授業をワークショップの具体的な組み立てについて、図を含めてイメージを出したので、それを前提としながら、それに加える形で、以下述べることとする。

（図1：湿地プログラムの創造・改善プロセス）参照

創造と改善のためには、図に示したようなプロセスが必要である。

その要点は、①日常生活の中での問題意識と、技と知識と智慧の醸成、②その中での現実の必要や人々の欲求、その両者を掛け合わせたところに成立する要求の探求が課題となる。③また創造のためには、先輩たちの残した作品の検討が欠かせない。それ抜きに無から有が生まれるわけではない。④同時に、自分のイメージ、直感を大切にすることが、欠かせない。とくに「創

造」を「妄想」と切り捨てないことが大事である。⑤できるだけイメージを作品化すること。自分の外に出して目の前に置いてみるのが大事である。その作品の一部は「商品」になりうるが、商品にならないが貴重な作品も多くあるので、商品化を排除することも不適切であるが、商品化だけを追求することも不適切である。

(3) 湿地教育プログラムと施設全体及び地域との関係

（図2：湿地教育プログラムと施設全体及び地域との関係）参照

湿地教育プログラムは必ず具体的な地域、具体的な施設等で実施されるものであるから、その地域や施設等の特性を考慮したものでなければならない。自然や社会、歴史や民俗・民族の特徴を踏まえることが大事なのは言うまでもない。同時に、財政や法制度、人員や地域の取り組みとの連携を積極的に視野に入れ、その地域地域の「湿地学」の創造と一体のものとして組み立てられることが大切であろう。

(4) 湿地教育プログラムの深化と人々における「志」形成過程

（図3：湿地教育プログラムの深化と人々における「志」形成過程）参照

湿地に関する教育プログラムの深化に伴って、それ

図1：湿地プログラムの創造・改善プロセス

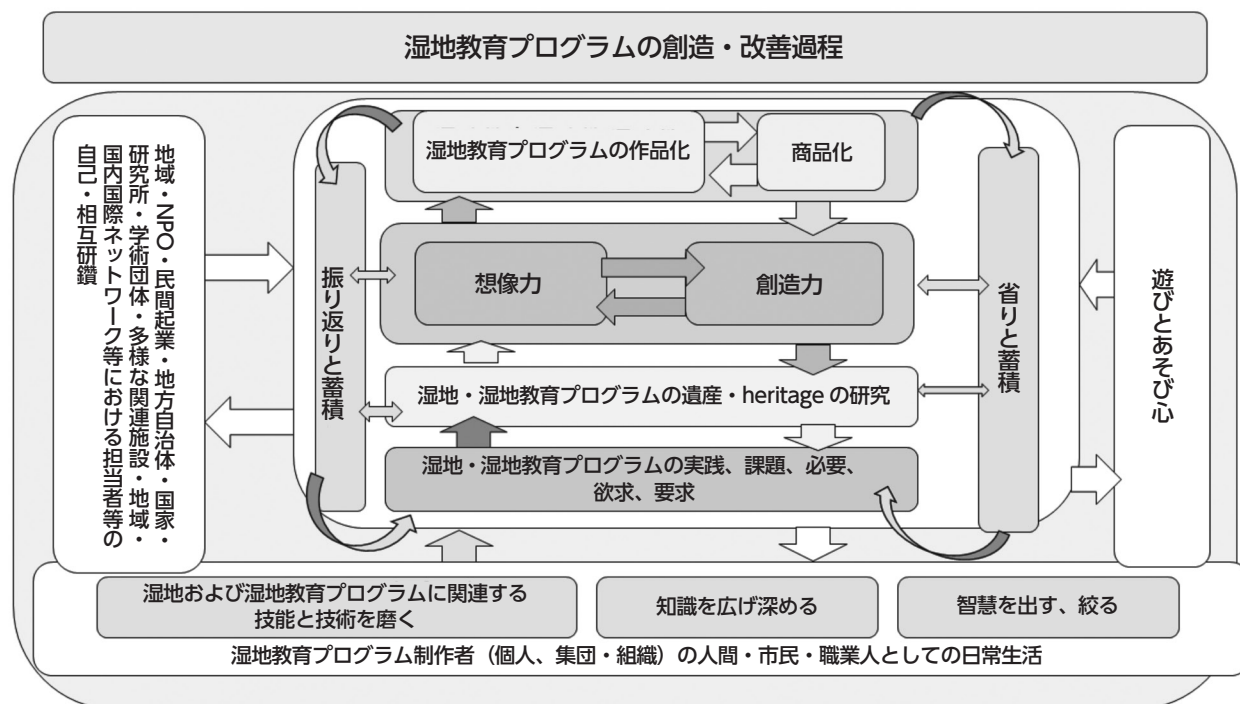
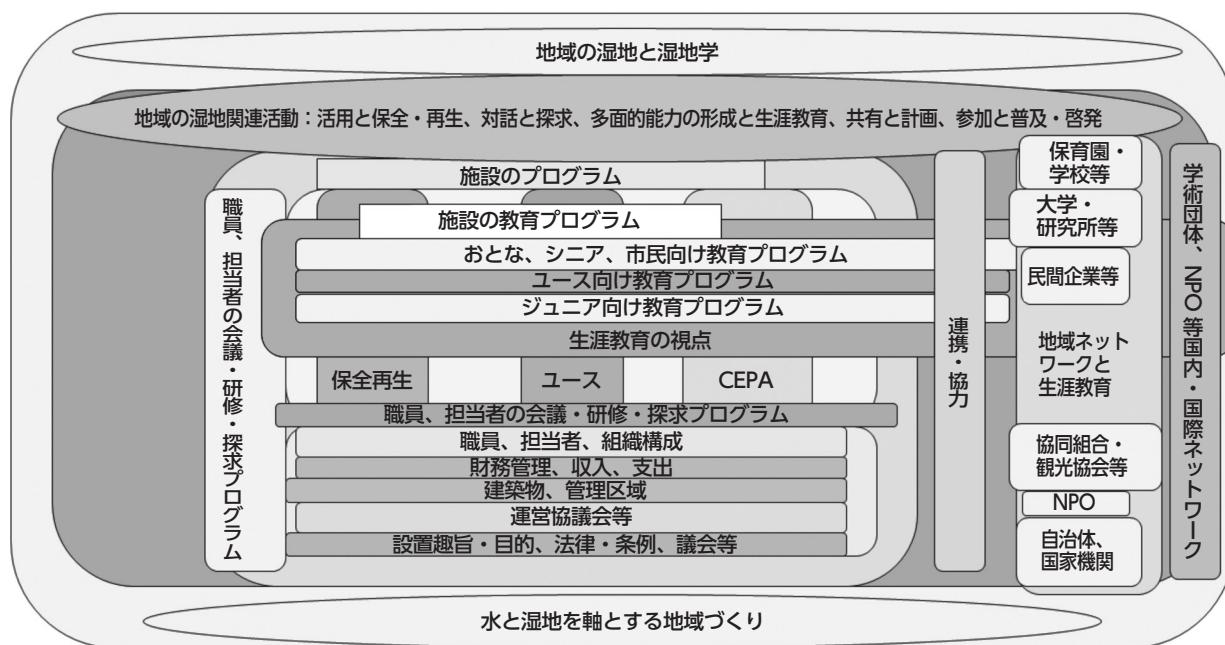


図 2：湿地教育プログラムと施設全体及び地域との関係



を担う人々の中で「絆」や「志」が形成されていく。この過程がないと、教育プログラムの深化は望めなくなる。また、この過程は自動的に進むものではなく、不安や葛藤、努力やぶつかり合い、率直な意見交換等を伴う、個人や人と人との関係性、組織・associationのstruggle=葛藤と奮闘を伴って初めて実現するものである。それはおおよそ次のプロセスをたどるものと考えられる。

①不安と漂流

このステージでは、「自分の居場所がはっきりしない」「自分には信念がない」「自分はなかなか他の人に

理解してもらえない」「心から信頼できる人はとても少ない」「これといって心から打ち込める面白いことが見つからない」「毎日生活はしているが、惰性に陥っている気がする」「生きていることに不満や不安、疑いを感じる」という自己認識や他者認識、を持っている。

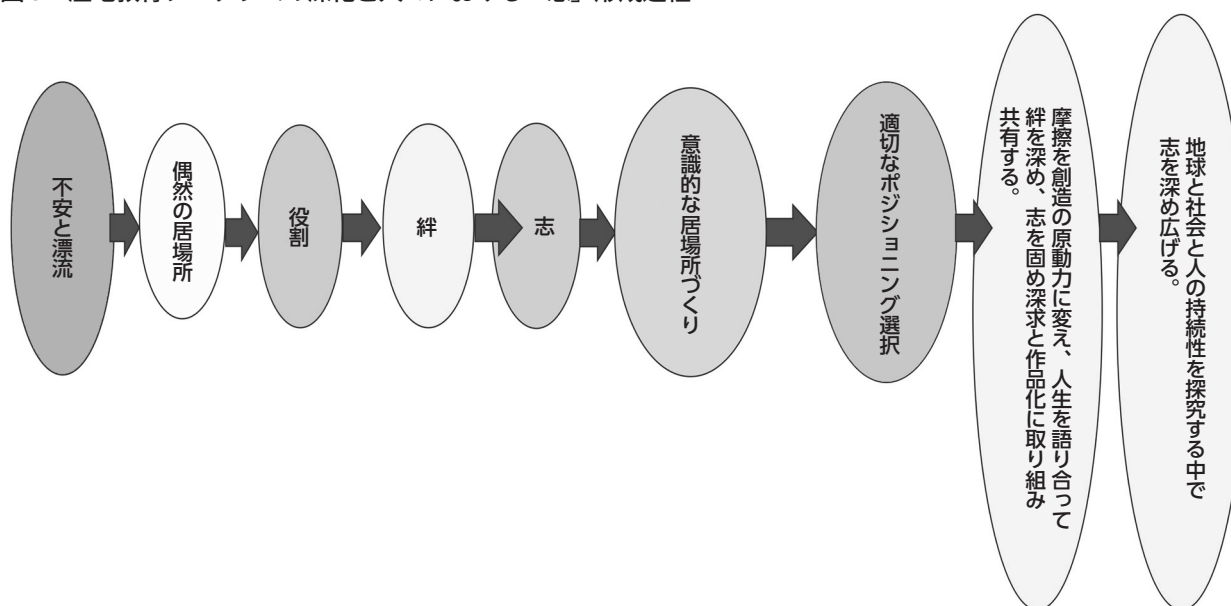
「生きているても仕方がないかな？」という一種の絶望感を持ちながらも、「できることなら生きたい」という希望は持っている。

〈自己肯定ステージ1〉である。

②居場所の発見

何らかのきっかけで、居場所が見つかる。

図 3：湿地教育プログラムの深化と人々における「志」形成過程



「ここは自分が居てもいい所」「ここにいる人たちは面白い、優しい」「自分のことを受け入れてくれる、こんな場所があったんだ」「この活動は楽しい」「こんな自然があったんだ」「この自然と出会っていると気持ちが落ち着く」という、という驚きと発見の世界である。

すなわち、〈自己肯定ステージ2〉の世界である。

③役割の発見と作品化

「自分にも人の役に立てることがある」「人の役に立てるのは嬉しい」「人への働きかけは面白い」「自分が積極的に参画すると楽しさが増える」「何かを作り出すことは面白い」「湿地や自然のいろんな側面が見えてきて面白い」

自分の役割と作品化、他者への貢献の楽しさを知り始めたステージである。

〈自己肯定ステージ3〉の世界である。

④葛藤と絆

「一緒にイベントやプロジェクトをやり切って充実していたから、これからも一緒にやっていきたいね」「いろいろと摩擦もあったけど、率直に話せて理解が深まったね」「一人ではできないことも、組織的にやると実現できるね」「でも、組織的にするには葛藤もあるね」「湿地やそれに関する取り組みについてもっと知ってみたいな」

絆が生まれてくる、〈自己肯定ステージ4〉の世界である。

⑤志の萌芽

「困難はあっても、このこと（湿地にかかわって、保全再生、ワイスユース、地域づくり、道の探求、相互の育てあい）を、自分の人生の柱の1つとして、探求し、実現していこう」「そのためには、孤独（solitude）を楽しみ、自分なりの道を探し、他の人の良いところを評価して、協力が必要でそれが可能な時は、協力し合っていこう」「湿地について、様々な取り組みについて、それにかかわる人々について、自分なりに『勉強』していこう」

時間的な持続性を意識する「志」が生まれてくる。

〈自己肯定ステージ5〉の世界である。

⑥意識的な居場所さがし、居場所づくり

「自分はどこでやっていけば、誰と生きていけば、自分の志を実現していけるのだろうか？」「当面、このことについて自分がやっていく組織・場所をこのあたりに設定しよう。」「当面、この人たちから学び、ともに探求し、仕事をしていこう。」「この仕事は人々に喜ばれる。この地域の中でこういう歴史的な意味がある。」ということを考え、思い悩み模索する。

〈自己肯定ステージ6〉の世界である。

⑦意識的なポジショニング

「この仕事をしていくうえで、自分だからできること、自分でないとできにくいことを、積極的に探していこう」「このポジションはあの人にやってもらおう。あの仕事はこの人たちと協力し合おう。」「自分の役割は、当面〇〇に限定して、この範囲で、こういうプロジェクトをやったらおもしろそうだな。」「この仕事は頼まれたから、それに面白そうだから、自分なりに味付けをしながらやってみよう。」というように、大きな全体を見る努力をしながら、多面的に自分のポジションを探り、人々との協力関係を多面的に構築していく。

〈自己肯定ステージ7〉の世界である。

⑧摩擦を想像の原動力に変え、人生を語り合って絆を深める

「プロジェクトを達成するのはなかなか骨が折れるし、人と協力し合うのも簡単でないけど、ストレスを原動力にして、悪魔のように細心に！天使のように大胆に！（黒澤明）やっていけば、何とかかなるかな？」「諸先輩たちは、こういうことについてどのように格闘してきたのだろうか？いろんな話を聞き、本や映像や現場を見てみたい。」「自分や自分にかかわってくれた人たちの人生を振り返ってみたい（⇒自分史の検討）」「人と腹を割って話すって、なかなか大変だけど、あの人がいたら大丈夫かな？この人とはどうやって接点を作って広げて深めていけばよいのだろうか？」「現実を変えていくには、技・知識・知恵の磨き方がまだまだ足りないな。」

〈自己肯定ステージ8〉の世界である。

⑨地球と社会と人の持続可能性を探求する中で志を深め広げる

「もっと楽しく充実している日々の暮らしやそれを支える様々な組織、自分たちの命の燃焼の舞台である地球の物質循環やそれを支える人たちに、自分たち自身がなっていく道を、本気で探求したい。それをできるだけ他の人たちと手を携えて。」

「それには、体力と精神的なタフさと、時間と、お金と物と組織が要るな。それをどうやって捻りだしていくか。」「また、国際的なことも含めて、連携を強化するには、まず、自分自身が作品化を進めることが欠かせないな。」「それと、前の世代からしっかり学ぶことと、次の世代へのバトンタッチを真剣に考えないといけないかな。」「楽しみながら、実行可能な取り組みを進めていきたいものだな。」

〈自己肯定ステージ9〉の世界である。

4. おわりに

上に述べた「創造的な教育」のための試論は、湿地

プログラムを例にとって述べたものであるが、これについては「キャリアデザイン研究科」の社会人大学院生たちが強い関心を示した。それは、この図式が湿地教育に限定されたものでなく、広い分野にも適合する、ある程度の普遍性を示している。

今後、学部や大学院での授業を続けながら、日本の

内外の、多くの現場の実践家＝研究者の人たち、アカデミズムで研究している人たちと広く議論していきたい。

そして、この視点から SDGs の 17 の目標を再整理し、生涯学習・社会教育と、国際化およびグローバルゼーションについての議論を深めてゆきたい。